

イメージ

児童生徒のコミュニケーション能力 の育成に資する芸術表現体験事業

サブタイトル

写真

事業の概要

本事業は、小・中・高等学校等に対し、NPO法人や劇場、芸術団体等に所属又は関係する芸術家や劇団員等を派遣し、地域の教育委員会や開催校の担当教師と芸術家等とが連携を図り、児童生徒を対象に、芸術のもつ表現手法を用いた、集団による創作過程を含む、計画的・継続的なワークショップ等の実施を通じて児童生徒のコミュニケーション能力の育成を図るものです。

コミュニケーション能力育成の必要性とその効果

コミュニケーション能力が求められる背景

■ ■ ■

コミュニケーション能力育成の効果

■ ■ ■

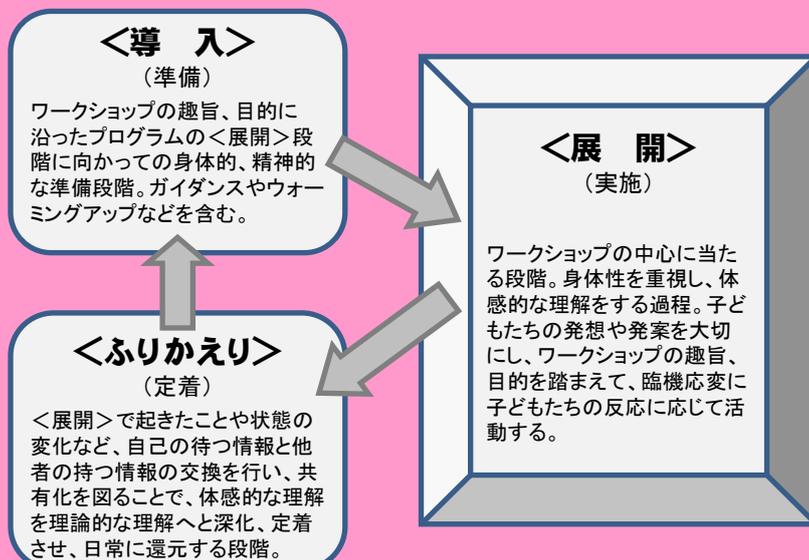
コミュニケーション能力を育成するためには・・・

次のような機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要があります。

- ①自分とは異なる他者を認識し、理解すること
- ②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること
- ③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと
- ④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと

児童生徒のコミュニケーション能力の育成には、上記の要素を取り入れた、「演劇などの表現手法を用いた計画的・継続的なワークショップ型の授業」が効果的

ワークショップの基本的な流れ



◆三つのサイクルについて◆

- ・このサイクルは、1回のワークショップの流れを表すとともに、複数回にわたるワークショップ全体における個々の回の位置付けにも相当するものである。
- ・このサイクルは、ワークショップのモデルタイプの1形式であり、子どもたちの活動の様子や状況によって、上記の要素を踏まえ、臨機応変に柔軟に対応して実施するものである。

<導入>と<ふりかえり>は、ワークショップという非日常の体験を日常の体験へと結び付けるための時間に相当する。

<導入>:ワークショップ実施に当たっての身体的、精神的な準備状態の形成を行い、<展開>につなげていく段階

<ふりかえり>:実施したワークショップの内容についての情報を他の参加者と共有することで、体験の深化、定着を図り、日常へと戻していく段階

こうした段階を経ることで、ワークショップをただの非日常の単発の体験として位置付けるのではなく、日常との連続性の中にあることを理解し、応用可能な状態にしていくことが可能となる。

ワークショップの実施例

※平成22年度「児童生徒の

事例1（小学校）

《対象児童生徒》3～6年生 《実施教科等》総合的な学習の時間
《実施分野》演劇 《実施回数》3回

《実施内容》

児童相互のコミュニケーションを円滑にそして豊かなものにするために身体表現を含めた創作ワークショップを行った。初回は、導入として簡単な身体表現による創作を行い、創作の基礎の体感的理解をねらいとし、グループ単位で身近な「場所」を身体で表現し、互いに鑑賞をした。その後、ふりかえりとして難しかったこと、楽しかったことについて発表を行った。2回目は少人数グループに分かれて、カードに書かれた言葉でテーマに関する詩を推敲しながら作り、その出来上がった詩を身体表現に置き換えた。これを各グループで発表、互いに鑑賞をし、振り返りを行った。3回目はグループごとにカードに書かれている登場人物の行為やせりふ、場面の状況などを、表現し、振り返りを行った。

《実施の効果》

課題を乗り越えることに対して、全体で助け合うという様子が見られ、児童同士の関係性がよりよいものになった。また、聞く態度にも変化が見られた。非常に高い集中力を長時間保持できるようになった。さらに、詩の創作過程で、推敲という過程をじっくり体感したことで、誤字脱字の修正にとどまらない、推敲に取り組む姿勢が見られるようになった。



事例2（小学校）

《対象児童生徒》5・6年生 《実施教科等》国語
《実施分野》演劇 《実施回数》5回

《実施内容》

川柳をつくり、それを基に身体表現の創作を行う。身体的に言葉を発することを学び、川柳をつくることを通し、ことばと詩的表現に対する理解を深め、創作を通じた、ディスカッション能力、コミュニケーション能力の育成をねらいとした。川柳については、専門家を招き、地域の人たちの協力を得て川柳づくりから鑑賞までを句会の形式で実施した。句会で作られた作品の中から幾つか選んで、川柳を身体で表現するパフォーマンスの創作をグループで行った。創作は児童たち自身で句の鑑賞を基に作品づくりを行っていく形式をとり、児童たちがグループごとに課題を乗り越えていくことで、創作過程を充実させ、共同作業を体感できるようにした。

《実施の効果》

ワークショップでの各回での創作の過程ではグループでの協働を重視した結果、人の意見に耳を傾け、作品をよりよくしていこうという意欲が強くなると同時に俳句や川柳の鑑賞力の向上も認められた。他のグループの作品を「見ること」や、自分たちの作品を「見られること」で、自分の表現が受け入れられる喜びを知り、違う価値観や表現を受け入れることができるようになってきた。結果、外部の人に対しても自信をもって応対することができるようになった。



事例3（中学校）

《対象児童生徒》2年生 《実施教科等》国語・音楽
《実施分野》音楽 《実施回数》4回

《実施内容》

自分たちが生活している地域の好きなところや自慢できるものをグループごとに話し合い、その内容を生かして作詞をし、曲作りをした。その際、地域の方言を取り入れることで、地域の特徴を表現した。最後には地域行事の一つとして、地域の住民に、生徒が創作した歌を発表した。

《実施の効果》

生徒同士でコミュニケーションをとりながら、地域のよさや自慢できるところについてそれぞれの体験を基に話し合い、再発見をするなど、自分たちの思いや地域を振り返るよい機会になった。また、作詞の際に地域の方言を取り入れてつくったことも地域の特徴を再認識することにつながり、生徒の心に残った。



コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」事業の実践事例

事例4（中学校）

≪対象児童生徒≫3年生 ≪実施教科等≫国語
 ≪実施分野≫演劇 ≪実施回数≫3回



≪実施内容≫

「敬語ワークショップ」として、敬語を使う場面を考えながら、演劇を創作し、発表を行った。
 初回は敬語が必要な場面を考えることを中心に、グループごとにアイデアを発表し、各グループが創作する場面を決めていった。2回目は初回で行った場面創作の基本を生かして実際に場面を作り、相互に鑑賞することを行った。敬語の日常的な用途について体感的に理解するとともに、グループ内での意見交換を通して、各自が居場所を見付け周囲とのコミュニケーション能力を向上させた。3回目は2回目のブラッシュアップを行い、振り返りとして、創作の中で難しかったことや楽しかったことを発表した。

≪実施の効果≫

初回はひっこみがちな生徒も多かったが、2回目の発表の時には物怖じせずにしっかり発表をしていた。また、より質を上げていきたいという意志も垣間見えた。敬語についても、敬語使用の心の在り方を体感的に理解できていた。
 講師からの細やかな声かけと毎回の振り返りの中で、最初は硬かった生徒たちの表情がゆるみ、色々想像をふくらませながら1つのシーンを創作していく姿に、普段の授業と違う生徒の一面を見ることができた。実際に体験したクラスは1クラスだったが、その後の授業に対する取組の積極性により変化が見られた。

ワークショップの流れ（事例）

演劇 （小学校）

<全体概要>

- 全回数：3回 ●分野：演劇 ●実施教科：社会科
- 対象：小学校4年生 ●対象人数：2学級53名（26名+27名）
- 趣旨：調べ学習を基に、身体表現の創作を行い、学びの深化を図る。
- 目的：◇他者との情報共有の仕方を体感的に理解する。
◇創作の過程で他者性の認識を深める。

<導入：第1回>

- 指導体制：講師1名+補助者5名
- ねらい：
 - ◇コミュニケーションゲームを通してコミュニケーションを体感し、理解する術を知る。
 - ◇コミュニケーションゲームを含めた演劇ワークショップというものを体験する。
- 内容：
 - グループ作りを目的としたゲームや簡単な創作を行う。
 - 1 ガイダンス
 - 2 ウォーミングアップ
 - 3 フローズンピクチャー
 - 4 小集団で場所の創作（「公園」を身体で表現する）
 - 5 発表
 - 6 ふりかえり
 - 7 クーリングダウン



<展開：第2回>

- 指導体制：講師1名+補助者5名
- ねらい：
 - ◇小集団による創作過程において、小集団への帰属意識を体感的に理解する。
 - ◇夏休みの調べ学習の課題を基にした創作の基点を作る。
- 内容：
 - 「下水道」の調べ学習を基に身体表現による創作を行う。
 - 1 ガイダンス
 - 2 ウォーミングアップ
 - 3 フローズンピクチャー
 - 4 創作のためのガイダンス
 - 5 話合い
 - 6 小集団による身体表現の創作
 - 7 発表
 - 8 ふりかえり
 - 9 クーリングダウン



<ふりかえり：第3回>

- 指導体制：講師1名+補助者5名
- ねらい：
 - ◇小集団による創作過程において、小集団への帰属意識を体感的に理解する。
 - ◇細かく時間を切って締切りを設けることで、活動を促進させ、創作を体感的に理解する。
- 内容：
 - 創作作品の仕上げと発表を行い、発表後にふりかえりを行って体験を共有する。
 - 1 ガイダンス
 - 2 ウォーミングアップ
 - 3 創作のためのガイダンス
 - 4 小集団による場面の創作
 - 5 ブラッシュアップ
 - 6 発表
 - 7 ふりかえり
 - 8 クーリングダウン



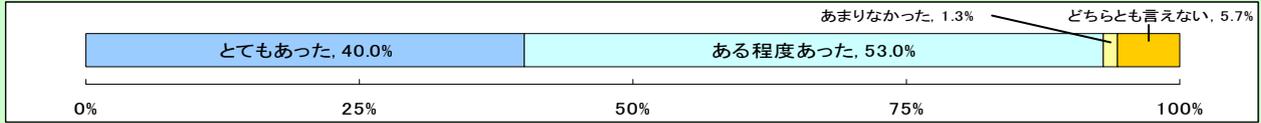
※ 本事業の後、担任の指導により、学習発表会において学年としての1作品にまとめ、発表した。

事業の効果

「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」に係るアンケート調査の結果

※平成22年度実施校(292校)のうち、230校でアンケート調査にご協力いただきました。

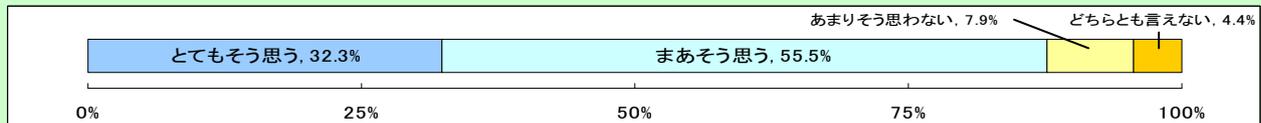
- 本事業の実施により、実施前と比較して児童生徒のコミュニケーション能力向上の効果があった。



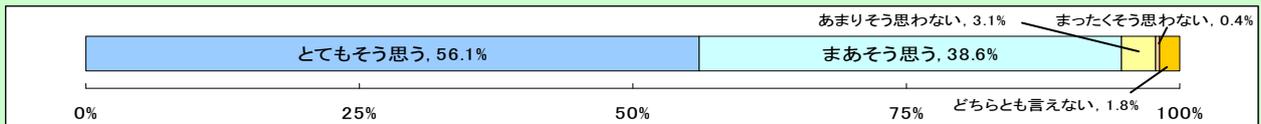
- クラスの子どもたちの関係が高まったり、協調性が高まったりした。



- 子どもたちが今まで知らなかった友達の良さや特徴を発見することができた。



- 芸術家の特性や指導に触れることにより、教員自らの指導方法の改善につながった。



- 今まで以上に、子どもたち一人一人の個性や能力を発見したり、理解することにつながった。



- 実施校の子どもたちや先生方の声(アンケート自由記述)

生徒自らが考えたアイデアや工夫が評価されることを通して、さらに学習意欲が向上する様子が見られた。
(中学校教員)

コミュニケーションを通じて自分の気持ちを正直に言えるようになった。
(小学生)

普段合わない人とコミュニケーションがとれた。
(中学生)

自然と人に話しかけられるようになった。
(小学生)

自分から何かしようとする気持ちになった。
(高校生)

自分を見せることや相手を知っていくこと、また色んなものの見方を変えてみるということが楽しんだということを知ることができた。
(高校生)

いろいろな人々から他人との向き合い方などを学ぶことができた。
(中学生)

児童間の信頼関係が深まり、学級としてのまとまりが強くなった。学校生活に意欲が感じられ、学習への取組も良くなってきた。
(小学校教員)

今まで知らなかった自分の可能性を見つけることができたのと、できないと思っていたことができるようになった。
(高校生)

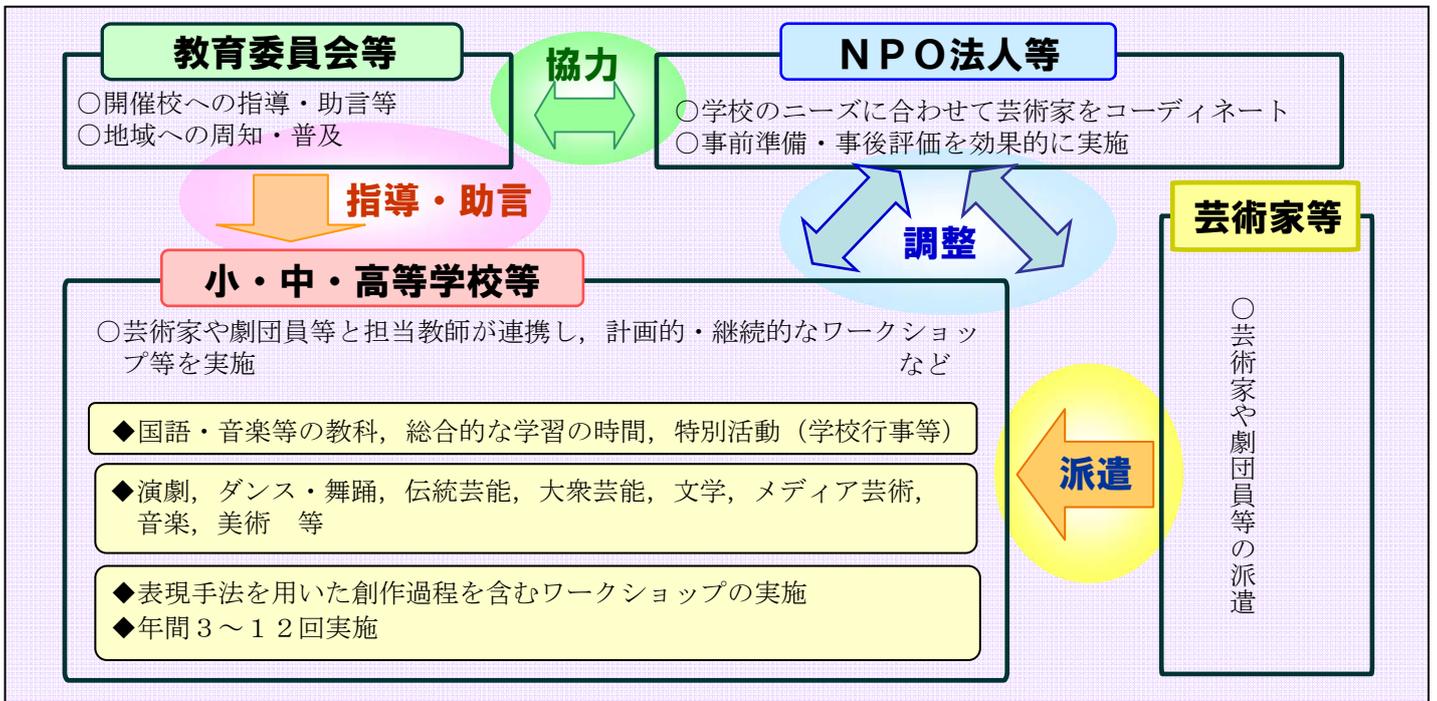
登場人物の気持ちや筆写の伝えたいことを意識するようになり、国語科の学習意欲が向上し、活発に発言しあうようになった。
(小学校教員)

人それぞれ違うことをあらためて学びました。
(中学生)

相手のことを考えるということを学べてよかった。
(小学生)

写真、コメントなど

事業の実施スキーム



○コミュニケーション事業は、上手な発表会の実現や技術の習得を目的とはせず、子どもたちのコミュニケーション能力（「本事業の必要性」参照）の育成を目的として、表現手法を用いた集団による創作過程を含むワークショップを複数回（3～12回）、継続的に実施するという点に特徴があります。

○「巡回公演事業」や「派遣事業」は、子どもたちの芸術を愛する心や豊かな情操を養うことを目的として実施します。

（巡回公演事業）

- ・全国を10ブロックに分割し、文化庁が選定した芸術文化団体が巡回公演を実施します。
- ・本公演と事前ワークショップの計2回を実施し、舞台芸術の鑑賞と合わせて芸術文化団体と子どもたちの共演を行います。

（派遣事業）

- ・文化芸術に触れることを目的として、芸術家による講話や実技披露、実技指導を実施します。
- ・実施回数は単発（1～3回）として実施します。